



「重要だと思うところに、線を引いてみてください」先生がそう言ったので、私は一生懸命、教科書の文字の下に鉛筆で線を引いた。

「ここも重要だ」「あ、ここも」

気づくと私は教科書のすべての文章に下線を引いていた。

あの頃から、私は何も変わっていない。今も、すべてのことが、下線を引きたくなるほど重要な出来事ばかりで、例えば今日の天気は曇りだったのだけど、傘を持って行くか行かないかで悩んでいたら、バスに乗り遅れてしまった。そしてバスに乗り遅れるという大事件を犯した私は、予備のバスに乗り込み、なんとか遅刻だけは免れたのだが、そのせいで、日課の「今日は何事もおこりませんように」というお祈りをする時間がなくなってしまった。

そのせいかわからないが、曇りという予報はニアピンではずれ、小雨が降ってきた。

そして傘をさそうとした瞬間、傘をバスの中に忘れたことに気づいたのだった。

あの時、あんなに迷わずに、さっさと傘を手に取りバスに乗っていたら。

一つの選択が、幸運へ導き、一つの選択が破滅へ導くのならば、その選択は慎重でなければならない。しかし、正しい選択をしたとしても、一瞬の不注意で、破滅の道へと転がり落ちていく。

すべてのことが重要な私にとって、すべての選択は慎重にしなければならず、そしてたとえ正しい選択ができたとしても、決して油断はできないのであった。

今日もたくさんの選択が、私に押し寄せる。

バス会社に電話をするのは、今がいいのか、昼休みがいいのか？

バス会社に確認が取れたとして、いつ傘を取りに行けばいいのか？

帰りにまた雨が降るかもしれないから、昼休みの内に取りに行った方がいいのか、それとも帰りでいいのか。

業者に電話をするときは、だれに電話を掛ければいいのか？A氏かB氏か。

電話をするのは午前がいいのか、午後がいいのか？

もしもいなかったら、またかけ直せばいいのか、伝言を伝えたほうがいいのか。

その答えを選択するたびに、私はすり減っていく。

だからなるべく選択肢を減らすため、私は決まりきった日常を送る。

朝は毎日みそ汁と、ご飯と納豆だけを食べ、決まった時間のバスにのり、トイレでお祈りをして、仕事に向かう。信号機には忠実で、車が来ないから赤でも渡るといふ選択肢はない。決まっていることは、決まっているままに。それが安心の近道だ。

それでも予期せぬ選択は、ふいにおとずれる。

誰かのお土産が、配られる。

「どれがいいですか～？」差し出されるお菓子に、私は圧倒される。すべてをよく見て吟味して

、できれば他の誰かが全種類食べて言った感想を聞いてから選びたい。そんな衝動に駆られる。いやしかし、人がおいしいからと言って、自分がおいしいと感じるとは限らない。味覚は人によって違うのだ。もし自分が大嫌いな味だったとしたら

そんなことを考えているうちに、お菓子の種類は一種類に減ってしまう。

「これでいいですね」最後の一つを渡される。

「あ、はい」

こんなことがよくある。

選択に時間をかけすぎて、タイミングを見失うのだ。

会議の席でも会話の席でも、たとえ話題に最適な知識やエピソードを自分が持っていたとしても、これは言うまいか、言うべきか。どのタイミングで言ったらいいのか？そうして迷っているうちに、話題は次へと変わっていきまう。

私は常に、みんなの手前と後ろで生きている。

そんな毎日に、私は疲れてしまった。

私は立ち止まり、横になる。その冷たい地面にぴたりと手をつけて。

目を閉じて息をしていると、色々な出来事が浮かびあがる。さっきした選択の結果を吟味する。あれはあれでよかったのだろうか。それとももう一つの道に行けばよかったのだろうか。同じ出来事を何度も何度も振り返る。そして私は眠れない。眠りたいのに眠れない。

その時、手の甲に激痛が走った。

「いてっ！」

目を開けてみると、ハイヒールを履いた女が、走り去っていく。「あら、ごめん」
どうやら手を踏まれたらしい。

女は軽やかな足取りで遠くのぼんやりと明るい方へと走っていく。

どうやったら、あんなに軽やかに走れるのだろう。

あの地面と踵の間にある空間で、どうしてもよい事はスキップして生きてゆくのだ。と私は思った。

自分には、到底ハイヒールなんてはけやしない。私はあきらめて、また目をつぶった。

「いてっ！」再び手の甲に衝撃が走った。

今度は何よ。と思い目を開けると、そこには、あの教科書が落ちていた。

どこからか落ちて来て、その角が当たったらしい。

私は寝ころんだまま、その教科書を開いてみる。しわしわになったページの全ての文章の下に、力強く下線が引っ張ってある。

「はは、これじゃ、どこが大事かわかんないよ」

その時私は気づいた。この教科書は、ふりだしに戻ったのだ。

全てが重要という事は、全て重要ではない事と、イコールなのだった。

「そうか」

私は重い体を起こして、立ち上がり、また歩き出した。

少し歩いてから後ろを振り返ってみると、粘土質の地面に私の扁平足の足跡がのっぺりと残っていた。

おわり

【2017-01-16】指さし小説 第10話

<http://p.booklog.jp/book/112579>

今回は、ちょっと弱っていたので、わかりやすいお題で助かりました。下線。私は定規できれいに引くよりも、フリーハンドでちょっとがたがたな線を引く方が好きです。その方が、活字の中で、目立つからです。それに、自分で引いたってゆう感じがして、自分の意志で、重要だと思ってるという感じがするからです。っていうか、その方が、早く引けるからです!!!

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/112579>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト